睡蓮の花

睡蓮堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
睡蓮の花

【Ｎコード】
Ｎ９９７０Ｙ

【作者名】
睡蓮堂

【あらすじ】
ある日、ある時、ある瞬間。彼女は原因不明の病でこの世を去り、次に目覚めた時に見たのは褐色の肌に赤い髪をした美しき女神・ユーフェリアだった。

ユーフェリアの力によって彼女・冴木漣は異世界ユーフェリアにある国の一つ、黄昏の国ノクティスへと落とされる。輪廻の輪から外れ、転生の軸から外れた彼女の運命は？

世界観、登場人物詳細など

世界観

　中世ヨーロッパの街並み酷似した風景の広がる魔法世界。科学という概念がなく、それ故現代世界のような高層ビルや自動車の類が存在せず、科学のすべてが魔法に代替えされたような世界である。また、人間以外の種族が存在し、種族によってその特色が大きく変わる。

国・地域・地名

★ノクティス（夜の国）　ユーフェリアに存在する安らぎと夜の国。一年を通して常に太陽が昇らない国で、日中でも夕暮れのような暗さをしている。

☆―ルーナルーメン・ウルプス《月光の都》　ノクティスの王都。人口およそ5万人～をも抱える大都市であるとともに、王の居城がある王都。

★ステラ・マレ（星の海）　ナイトレイン王家の別城が避暑地。高原の一画に建てられた石造りの城で、夏の夜には無数の星々が見られることからステラ・マレと呼ばれている。

その他

☆―ルキドゥス・アルブス・フロース《光り輝く白い花》　ユーフェリア全土に古より伝わる伝承に重畳する聖なる乙女の事。諸説があるものの、一説にはこの光り輝く白い花がは創生神ユーフェリアに選ばれた異世界の人物で、その身体のどこかに花の証であるユーフェリアの聖痕があり、嫁ぐ事でその者に莫大な英知と富をもたら

すと言われている。

★通貨・物価

通貨は通貨はすべて硬貨であり紙幣通貨は存在しない。黄銅貨、赤銅貨、銅貨、青銅貨、銀貨、金貨、白金貨となっている。交換レートは黄銅貨１０枚＝赤銅貨、赤銅貨１０＝銅貨、銅貨１０枚＝青銅貨、青銅貨２０枚＝銀貨、銀貨５０枚＝金貨、金貨１００枚で白金貨となる。　諸国、地域により差はあるもののノクティス王国は概ね安定している。両親＋子供二人家族の平均収入がおよそ銀貨２枚と青銅貨１０枚であることに対し、リンゴ一個が約赤銅貨９枚～銅貨１枚。一回の外食が銅貨８枚～青銅貨１枚ほどと概ね日本と変わらない。

☆移動・交通

乗合馬車　ルーナルーメン・ウルプス内を循環する庶民の足。王都や大きな町には必ずある。一回の乗車賃が銅貨１枚と安値なことから、大都市に住む庶民には欠かせないものとなっている

長距離馬車　都市や街を繋ぐ馬車。主に冒険者や商人が利用するものの乗合馬車と違い、個人で借りる事が多いため値段は高い。

飛竜車　主に貴族が好んで所有する移動手段。飛竜と呼ばれる小型の竜を飼いならし、客車を引かせている。馬車に比べスピードがかなり早い。

天馬車　貴族や王族がその優雅さから好んで所有する。文字通り天馬に客車を引かせたもの。

☆登場人物

冴木漣（さえきれん）（２０）　突然王城に現れた異世界の女性。ユーフェリアに

伝わる伝承になぞらえ王の花嫁として、王城の妃の間に置かれる。艶やかな黒髪と黒曜石のような瞳をした麗人。当初、元の世界に戻りたいと強く望んでいたが、王城の人間と交流を持つうちに迷いが出始める。

アベル・ナイトレイン（２５）　異世界ユーフェリアにあるノクティス王国の若き王。月の光のような銀髪と冬の湖色の瞳の麗人。一見、怜悧な印象を持たせる容姿をしているものの、誰よりも国と民の事を思う賢王。幼い頃から聞き親しんだ物語の登場人物である”次元渡りの少女”の瞳と髪をした漣に心奪われる。

大賢者ジークフリード（？）　時空の流れの中を旅する古の賢者。一説にはノクティス王家の初代国王であり、創生神ユーフェリアの使いとも言われているが真相は定かではない。漣がユーフェリアに落ちる直前に接触した人物。

プロローグ、的な

その夜、ノクティスの若き国王アベル・ナイトレインは一日の執務を終え、ようやく自室へと戻っていた。遅めの晩餐と湯浴みを終え、ベッドサイドに用意されていた葡萄酒（ヴィヌム）を軽く煽り、小さなため息を零すとベッドにはいろうと立ち上がる。が、青年はなんとなく感じた違和感に、ふと敷布にかけていた右手を止める。

ややあって、何を思ったのか勢いよく敷布を捲り取ると、目の前に映る光景に思わず息をのんだ。国王のベッドの中、膝を抱え小さくなった少女が眠っていたのだ。否、〝少女〟と呼ぶには些か語弊のある膨らみをもった女が、気持ちよさそうに寝息を立てている。

王宮内の中でも、特に警備の厳しい国王の寝室で堂々と眠る珍妙な格好の女。敵対する国の暗殺者、ないしは自国の利と金銭の事しか考えられぬ馬鹿貴族がよこした娘が夜這いをかけに来たかと思っていただけに、この状態は予想できなかった。

『……おい』

とりあえず、声をかけては見る物の女が起きる気配はみじんもない。

よくよく見れば、頬に残る涙の跡。

格好からして、他国の者と考えるのが妥当だろう。だが、いくら記憶を反芻してみても、このような着衣を纏う国は思い出せない。友好国にも敵国にも。

さらに、色素の薄そうな象牙色の肌と星を散りばめた夜色の髪とは不思議だ。ユーフェリア大陸に黒い髪の人間は生まれない。それは古より、創生神・ユーフェリアの持つ色が黒だからと言い伝えられているからだ。そう、黒は神の色。この世で最も尊い貴色なのだ。

一瞬、幼いころ乳母が寝物語に話してくれた伝承物語が頭をよぎるが、まさかと軽く頭を振る。

頭を軽く振って、寝ている女へと近づいた。ここまで近づいても全く起きる気配がない。

アベルはどうしたものかと、ため息をついてベッドの淵に腰を下ろした。

そうして、無意識に女の髪に手を伸ばす。

触れた夜色の髪がサラサラと指の間を抜ける。初めて触れる上質な絹（セーリクム）のような質感に、なんとなく唇を寄せかけて、アベルは慌てて身を引く。

『……おい』

少し強くゆすると女がうっすらと目を開けた。髪とはまた違う、黒曜石の瞳が見えたが、焦点はあっていない、寝ぼけているのだろうか？

ゆっくりとアベルを見上げると、女は優しげな微笑を一つ零した。

そしてまたコテンとベットの上に転がってしまう。微笑みを浮かべ、再度眠りについた女を前に一瞬、どうした物かと逡巡したアベルはすぐに結論に達した。

（危険はなさそうだな）

人、二人が寝てまだ十分にスペースはある。暗殺対象の部屋で暢気に寝る暗殺者もいないだろうし、貴族のバカ娘でもなさそうだ。

そう考え、国王は女の隣に寝転んだ。

銀の青年

目が覚めると見知らぬ人の腕の中にいた。どうせまた従兄が酔っぱらってベッドを間違えたのだと思いそのまま胸にすり寄ると、いつもと何かが違う事に気づいた。

やけに逞しかったのだ。確かに従兄は人に見られるという仕事柄、自分の見た目にはこちらが何もそこまでと思うほど気を使っていた。それ故、ある程度身体を鍛えて余分な肉が付かない様にもしていたが、ここまで逞しかっただろうか？

いや、これはおかしい。明らかにおかしい。

意を決して晴が顔をあげると、冬の湖色の瞳とぶつかった。驚いているのか、ちょっと瞳が見開き気味だ。月の光のような銀髪と冬の湖色の瞳の、日本人ではない青年。

顔は恐ろしいほど整っている。
なまじ整っているだけに、髪の色や瞳とあいまって少し冷たい印象がある。

感じたほどがっしりと胸板が厚いわけではないが、引き締まった、いわゆるボクサー体型の身体は何か武術でもならっているのだろうか？と、青年の胸に頬を寄せながら自分がちょっと混乱しているこ

とに気がついた。

知らない人の胸にすり寄って、筋肉の確認をする乙女はあまりいないだろう。というか、知らない女にすり寄られて大人しくしているこの人も何か反応をしてほしい。

青年はそんな彼女をただ見ていた。あまり表情は変わらなかったが、なんとなく怒っている雰囲気ではない。

「お、おはようございます？」
『あぁ、おはよう』

外国人なのに言葉が通じる。それに、きちんと挨拶は返してくれた。

少なくとも直感から言って悪い人ではなさそうだ。抱きしめられているのだが、他に何かされた様子もないし、彼が落ち着いている様子から考えて、これが彼のベッドなのだと予想がつく。

（やっぱり謝るべきかな？）

自分が悪いわけではないのだけれども。考え始めた彼女の横で青年はゆっくりと彼女を抱きしめていた腕を外してベットから上半身

を起こし伸びをした。

しなやかで、優雅な動きだ。やっぱり、彼の様子からして危険はなさそうなので、彼女もあくびをして伸びをした。

（ここ、どこだろう？）

昨日、自分はいつもと変わらない一日をすごしたはずだ。明け方から仕事に向かう従兄を起こし、朝食を食べさせた後、身支度を手伝って玄関で見送った。

その時、従兄が”お前はもう俺の嫁決定だな”と冗談めかして笑ったのを、彼女はちゃんと覚えていた。彼を送り出してからはいつもより随分と早い時間だった事もあり、のんびりと家事をかたずけると、ホッとソファーで寛いで簡単な昼食を取った後、特にすることもなくなって夕方の買い物まで少しソファーでうたたねをしたのだ。

いつ帰るか分からない従兄と自分の夕食の準備をして、風呂を済ませると彼女は早々にベッドに入った。そう、間違いなく３ＬＤＫの一般の人が住むにはかなり広めの自室のベッドに確かに潜り込んだはずだ。なのに……

とりあえず、初めて会った人への基本を実行してみた。

「あの、はじめまして、私は漣　冴木と言います」

『レン・サエキ？』

「はい、漣がファーストネームで、冴木がファミリーネームです」

外国人っぽいからこういう名前の紹介をしたがどうやらあっていたらしい。ちょっとほっとする。

『私はアベル。アベル・ナイトレイン。黄昏の国ノクティスの王だ』

そういって、彼は漣の黒髪を一房掬い口づけた。

（……へ？）

一瞬、自分が何をされたのか分からず、彼女は固まる。

『ところで……』

何かを言いかけた青年の言葉を遮るように、大きな音を立てて扉

が開いた。

『陛下、陛下、陛下～！！！！』

バタバタと足音を響かせて部屋に入ってきたのは、この国の神官長にして貴族の才媛と名高い、フリードリヒ・ウェルネスだった。

『フリードリヒ……うるさいぞ、一度呼べばわかる……』

『し、失礼しました。ですが、陛下一大事ですぞ！！先ほど――――あの、その方は？』

薄い水色の髪をゆるく一つに纏め、白を基調に金の縁取りがされたまるでローブのような服を纏った中世的な麗貌の青年は、漣を見て顎が外れそうなほどポカンと口を開けている。

『へ、陛下……その女性……まさかっ！？』

まさか、なんだと言うのだろう。やけに焦っている水色髪の青年のマヌケ面がもったいないと思う漣を余所にアベルはふと漣に尋ねる。

『レン、君は幾つだ？』

「へ？２０歳です」

傍目にわかる程、ぎょっとされた事になんとなく傷つくなぁと思いつつ、漣はアベルに尋ね返した。

「アベルは幾つなんです？」

『２５だが？』

これはこれで驚く。その落ち着いた雰囲気からもう少し年上だと漣は思っていた。そのことが顔に出ていたのか、アベルは一瞬ムッとして言った。

『私は普通だ。レンが胸以外小さすぎるんだろ？』

「キャーーーー、どこ見てるんですか／／／！？」

銀髪の美貌の青年の視線を胸に感じ、漣は真っ赤になりながら慌てて両腕で胸を隠す。

『別に減るものではあるまいに……』

「そ、そういう問題じゃありません！！男性が女性の胸をそんなマジマジと見ちゃいけません！！」

そんなやり取りを繰り返す二人の下に、先ほどまで茫然としていたフリードリヒがつかつかと歩み寄る。そして、徐にベッドサイドの床に膝をついたかと思うと――

『その御髪の色、瞳の色、”女神の贈り物”とお見受けしました！！』
「は？」

フリードリヒの言葉に漣は思わず首を傾けた。

『間違いございません！！あなた様は”女神の贈り物”。陛下の花嫁となり未来の王妃となられるお方にございます！！』
「は、花嫁～！？」

うわずった声であたふたとフリードリヒから距離をとる。

『……レン？』
「あ、あの、その……えっと」

『おぉ、こうしてはいられません！！陛下、私はこれで失礼いたします。”女神の贈り物”が降臨されたのですすぐさまこの事実を民にも知らしめねば……あぁ、議会での発布も――――』
「へ？あ、あのっ」

『まぁ、待てフリードリヒ。その話はもう少しレンと話してからだ……』

『は？ですが……』

忠誠を誓う主の言葉に、フリードリヒは怪訝な表情を見せる。

『お前のいう事が正しいなら彼女は違う世界から来たという事だ。ならば、彼女は女神ユーフェリアの事も、この世界の事も知らないのだ。いきなり花嫁だ、女神の贈り物だと言われても混乱させるだけだ……そうだな、レン？』

「へ？……はい」

『とりあえず、何時までも夜着のままでいるわけにもいくまい。フリードリヒ、セシリアとセリーヌを呼んで彼女の世話を……レン、朝食は何がいい？』

「えっとなんでも……」

『ふむ、ならば適当に用意しよう。この城の料理長の腕はなかなかの物だぞ』

にっこりと柔らかな微笑を浮かべたアベルにレンは思わず頬を赤らめた。その後、アベルの私室に恭しく現れたそっくりな二人の女性に連れられて、漣はアベルの部屋を後にした。

与えられた物

「えっと、じゃあ……私はその女神様にこの世界に落とされたということですか？」

朝食を食べ終わったテーブルで、漣はアベルの話をまとめた。

『端的に言えば……』

「そ、そんなっ、じゃあ帰る方法は――――私、困ります！！」

『レ、レン様っ、落ち着かれてください！！これはとても名誉な……』

「そんなのいりません！！家族がいるんですっ、私を待ってる人が！！」

『落ち着くんだ、二人とも……フリードリヒ、お前は熱くなり過ぎだ』

『で、ですが、陛下……』

『お前は少し黙ってろ。レン、君の事は分かった……だが、実際問題我々には君を元の世界に返してやるだけの力がないのが現実だ』

そういって、少しさみしげな微笑を見せたアベルに、漣の胸がチクリと痛む。

「あ……」

『もちろん、君が家族に会いたい、自分の育った世界に戻りたい気持ちもわかる。だから、こうしてはどうだろう？』

アベルの、国王の提案に漣はジッと耳を傾けた。

『現段階では君を返す手立てはない。だが、私は王命として君を元の世界に返す手段を探させよう。もちろん、確実に帰してやれる保証はないが力は尽くす。それまで、君はここにいて欲しい』

「え？」

『もちろん衣食住についても保障するし、他に欲しい物があれば可能な限り用意しよう。その代り、君の世界の事を教えて欲しいのだ』

「私の、世界の事？」

『あぁ、我々にとって未知の、見たこともない世界だ。何かの役に立つかもしれない』

そういって、アベルは淡い微笑を浮かべた。それは、彼女にとって願ってもない申し出にも思えた。右も左も分からない世界に何の前触れもなく放り出され、この世界の常識も、生きていく術もない

のだ。ここで、彼の申し出を断っても自分は野垂れ死にするしかない事ぐらい、彼女にも分かっていた。

「分かりました。しばらくお世話になります」

ペコリと頭を下げてそう言った漣にアベルは優しげな微笑を浮かべる。その後、セシリアに連れられた漣が退室するのを見届けて、アベルはフリードリヒに向き直る。

『何か言いたいことがありそうだな？』

『……は、僭越ながら…宜しいのですか、あのようなお約束をなさっても？』

『あぁ、どうせ彼女には真実は分かるまい。それに、ようやく手に入れた”女神の贈り物”をそうやすやすと手放せるものか……』

『はぁ、しかし万が一レン様がお知りになったら……』

『案ずるな、この話を知っているのは私たち二人とセシリアだけだ。お前はもちろんセシリアも他言することはあるまい』

『それは、もちろんでございますが……』

言いかけたフリードリヒにこの話の続きをするつもりはないのか、アベルは背を向けて窓の下に広がる庭園を眺めた。

『では、私はこれで……』

仕方なくアベルの背に深々と腰を折ったフリードリヒに声がかかる。

『フリードリヒ』
『はい？』

『彼女に部屋を与えてくれ』
『えぇ、それはもちろん』

『青玉の間を……』

恭しい礼をしながらアベルの言葉を聞いていたフリードリヒは思わず目を丸める。

『陛下、しかしそれは……』
『青玉の間だ』

『……かしこまりました』

再度、深く礼を取り今度こそフリードリヒは退室した。

一人になった室内で、アベルはひそやかにため息をつくのだった。

異世界の朝

この世界に来て最初の朝、セシリアに起こされて漣はベッドの上でぼーっと辺りを見回す。

（……あぁ、そうか……ここは…）

昨夜遅くベッドに入った漣は、眠って目覚めたらすべてが夢である事を願いながら眠りに落ちた。が、その願いは空しく散り自分はやはり異世界にいるのだと再確認するに至ったのだ。

「レン様、先ほど陛下より言伝がありましたわ。朝食をご一緒にいかがですかとの事ですので、先に身支度を整えさせていただきたいのですが……」
「あ、はい」

セシリアの言葉に、おそらくアベルが自分に気を使ってくれているのだろうと判断した漣は、慌ててベッドから降りる。

生まれて初めて着た裾の長い寝間着――いわゆる、ネグリジェと言われる夜着はどうにも歩きにくく、危うく漣は転びそうになった。

「レ、レン様っ！？」
「わわっ、だ、大丈夫です……」

「ほっ……驚きましたわ…そのように慌てられなくとも大丈夫ですわ、少しくらい遅れても陛下はお気になさいません」
「は、はぁ……」

「それよりも、レン様が転ばれてお怪我でもされたらそれこそ陛下は悲しまれますわ」
「そうでしょうか？」

「それはもう！！と、いいましてもあまりお待たせするのもなんですからね……失礼いたしますわね」

言いながら、セシリアは漣の手を取りパウダールームへと導く。
不思議な事にこの世界には”科学”という概念が全くない。にも拘わらず、この世界の水回りは彼女が使っていたものとまったく同じなのだ。いったいどういう仕組みになっているのか、風呂上りに身支度を手伝ってくれたセシリアに尋ねてみたところ――

「あら、レン様のいらっしゃった世界には魔法はなかったのですか？」
「へ？魔法、ですか？」

「えぇ、この世界の者は皆、大小はありますけど魔力を持っておりますわ。その魔力を使って生活しておりますの」
「え、じゃあセシリアさんも魔法を使えるの？フリードリヒさんも王様も！？」

「え、えぇ……」
「じゃあ、あの水回りや部屋の灯も魔法？」

驚く漣ににっこり笑ってセシリアは頷いたのだった。

冷たい水で顔を洗い、まだ一人で着るには難しいドレスをセシリアに手伝ってもらいながらなんとか着ると、今度は髪を結ってもらうため大きな鏡台の前に腰を下ろす。

「はい、終わりました」

鏡の中、漣の髪を結い終わったセシリアがにっこりほほ笑む。

「わぁ……すごいセシリアさん美容師さんみたい！！」
「あらあら、レン様どうかセシリアとお呼びくださいまし。びようしさんですか？」

「うん！！えっと美容師さんって言うのは専門の職業の人で、お客さんの髪を切ったり染めたり綺麗に飾ったりする人かな？」

「まぁ、そんなお仕事があるのですねぇ」

感心したように

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9970y/

睡蓮の花

2011年12月7日04時04分発行